

第3回集中ワークショップ結果とりまとめ

1. 集中ワークショップの開催概要

(1) 開催目的

釜石市復興まちづくり基本計画の素案づくりに、釜石市民が主体的に関われる場をつくる（市民の生の声を広く吸い上げて計画案に取り入れていくための機会をつくる）ことを目的とする。

(2) 対象地域

ワークショップの対象地域は、東部地区と鶴住居地区である。

(3) 開催日時、場所

平成23年6月11日(土) 8時30分～19時 会場：釜石地区合同庁舎4階大会議室
平成23年6月12日(日) 9時～20時 会場：釜石地区合同庁舎4階大会議室
平成23年6月13日(月) 10時～13時 会場：岩手沿岸南部クリーンセンター

(4) 参加者

市民参加者 103名（3日間の延べ人数）

地区	テーマ	テーブルマネージャー	Tマネ補助	記録・作業協力
鶴住居	A 防災	松本健一(建技研)	郷右近英臣(東北大)	伊東建築塾、 学生(東北大、工 学院大、関東学 院大)
	B 地域性	中津秀之(関東学院大)	島田聡子(建技研)	
	C 産業	細谷州次郎(建技研)	岡田豊(みずほ総研)	
	D 居住	秋田典子(千葉大)	小野寺仁(建技研)	
東部地区	A 防災	中島直人(慶応大)	宇川弘郎(東北大)	
	B 地域性	吉岡寛之(伊東建築塾)	久留島卓朗(建技研)	
	C 産業	瀬田史彦(大阪市立大)	東建男(伊東事務所)	
	D 居住	大堀研(東京大)	岩間妙子(建技研)	

全体：伊東豊雄、遠藤新(都市計画)、小野田泰明(建築)、越村俊一(防災)

(5) 内容

第1回集中ワークショップは、「被災エリアのまちづくりの方針を考える」をテーマに、6月11日から13日まで3日間にかけて行われた。ワークショップを行うに当たり、「釜石市復興まちづくり基本方針」をもとに4つのテーマと主な論点を設定した。

釜石市復興まちづくり基本方針には「災害に強い都市構造への抜本的転換」、「この地で生き続けるための生活基盤の早期復興」、「逆境をバネにした地域経済の再建」、「子どもたちが未来に希望を持てるまちづくり」という4つの方針が掲げられている。これをもとに「防災」、「地域性」、「産業」、「居住」という4つのテーマをワークショップで設定し、各テーマ、以下の論点に基づき被災エリアのまちづくりのあり方を検討した。

「防災」について：災害に強い釜石

- 災害に強い釜石になるために何が必要か。L1, L2, L3の適用
- 過去の防災対策は有効に働いたのか。何を復旧すべきか。
- 住宅や公共施設等の高台移転／高所移転について。
- 浸水地域（水際の平地等）をどのように再生するか。



- 避難経路、避難のあり方をどう考えるか。

「地域性」について：取り戻したい釜石の風景/未来へ繋げたい釜石の風景

- 鵜住居／東部地区の風景の特徴は何か。今どこにどのような形で残されているか。今後どのように残せるか。
- 各風景の特徴と各地区での暮らし方との関係は。
- 風景の骨格を考える：地形、海、山、街、気象・生態系を含めて
- 津波被害後に新しく生まれた風景をどうするか。
- 慰霊の場を考える。将来の世代に何をどのように伝えるか。

「産業」について：生業の再生/経済活動の基盤の再生

- 水産業・関連産業の再生（関連施設整備、後背地の土地利用等）
- 中心商店街／中心市街地の再生
- 観光産業の再生
- 釜石市主要プロジェクトの再生（水際の産業関連）
- エコタウン事業、リサイクル事業、海洋バイオテクノロジー研究、リサイクルポート、物流基盤整備、新釜石魚市場建設、海と山のグリーンツーリズム、中心市街地の賑わいづくり
- 浸水エリアの活用、必要なインフラや施設、新しい産業、等
- 震災以前からの遊休未利用地をどうするか

「居住」について：住み続けたい釜石

- 避難者は今どこでどのように暮らしているか。
 - どの場所でどのように住みたいと思っているか？
 - コミュニティの再生のための課題は？
- 居住・なりわい・産業の他に、どのような場の再生が必要か。
 - 地域社会の再構築にむけて何が必要か
- 復興につながる仮設市街地とは？
 - 避難所からどこに仮住まいを移すか？
 - 仮設住宅のほかどこに何が必要？（店舗、他）
- 震災前からつづく人口減少と高齢化の趨勢をどう考えるか。

(6) スケジュール

以下のスケジュールでワークショップを進めた。

6/11(土) 現地を知る・課題を探る		コアタイム
8:30-9:30	WS オリエンテーション 越村先生レクチャー チーム分け(2地区 × 4テーブル)	
9:30-10:30	作業 1: 作業方針を決める ・各テーマに関する論点の整理 ・配付資料読み込み、現地調査段取り ・ヒアリングのアポイント等	段取り決め 9:30～10:30
11:00-15:00 (昼食は適宜)	作業 2: 現地調査・情報収集 ・課題の整理 + 課題図の作成 ・WS 会場では意見収集などを適宜	
15:00-17:00	作業 3: 現況分析 ・課題図の作成、地域資源図の作成	議論 15:00-17:00
17:00-19:00	■発表 1: 作業報告 × 8 チーム (@発表 5 分 + 意見交換等 10 分)	発表・意見交換 17:00-19:00



19:00-20:00	◎第1回釜石市復興プロジェクト会議 (今後の進め方 他)	
-------------	---------------------------------	--

6/12(日) 整備の方針を考える		コアタイム
9:00-11:00	作業 4: 現況分析のつづき ・前日の意見交換を踏まえて修正等 ・ヒアリングなど調査の補足	
11:00-12:00	<昼休憩>	
12:00-15:00	作業 5: 整備方針図の作成 ・各テーマに関する基本方針の整理 ・図にまとめる項目:(1)防災・都市基盤、 (2)土地利用、(3)都市施設、(4)その他	議論 12:00-15:00
15:00-17:00	■発表 2: 鶴住居地区 (@発表 10 分+意見交換 20 分)×4 チーム	発表(鶴住居) 15:00-17:00
17:00-17:30	<休憩・後半準備>	
17:30-19:30	■発表 3: 東部地区 (@発表 10 分+意見交換 20 分)×4 チーム	発表(東部) 15:00-17:00
19:30-20:00	コメント + 質疑応答 + まとめ	

6/13(月) アイデアを出す		コアタイム
9:00-10:00	作業 6: 整備方針のまとめ ・前日の質疑を踏まえて方針の再整理	
10:00-11:30	作業 7: まちづくりアイデアの自由討論 ・8 テーブルを市民が自由に動き議論 ・整備方針の精査、整備等のアイデア	議論 10:00-11:30
11:30-13:30	■発表 4: 作業報告 (@発表 5 分+意見交換 10 分)×8 チーム ・意見の紹介、素案整理の方向性	発表 11:30-13:30
13:30-14:00	<会議準備>	
14:00-16:00	◎第 2 回釜石市復興プロジェクト会議 (骨子案等の審議)	



2. 鵜住居地区のまとめ

鵜住居地区において、防災、地域性、産業、居住の視点より土地利用のあり方について検討を行った。

2.1 防災グループのまとめ

(1) グループ討議の整理

◆被災前の意識

- ・防災意識は非常に高く、昔の津波被害の教訓を伝える“てんでんこ”や毎年避難訓練は行っていた
- ・津波警報の日常化、チリ地震による被害が最大の津波被害だと思っていた人が多く油断していた

<例えば>

2階に逃げれば大丈夫

ここまでは来ない

津波警報が3m、4mと言っても殆どこないから大丈夫

◆津波襲来時の状況

【避難】

- ・年数回行われる訓練により、迅速な避難ができた
- ・浸水地域を指定避難所に設定していた所もあり多くの命が失われた

○学校からの避難／小学生を“助ける”中学生

学校では、防災教育が徹底されていて、集団避難が成功

○老人ホームからの避難

○寺社仏閣への避難

×防災センター（避難所ではなかった）

浸水範囲にあった防災センターは、近くに高台が無く津波が来た時には、他の場所に避難できなかった。（逃げた人の1/3以上亡くなった）

【家に残った人】

- ・息子が迎えに来るのを待っていた人
- ・体が不自由で動けなかった人
- ・油断をしていた人
- ・家と共に死を選んだ人

【水が見えなかった】

- ・水（海）が見えない事で、逃げおくれた人がいた
（津波が想定されていない場所に住む人）
- ・地震後は情報源が断たれ、避難に関する情報がなく逃げる判断が遅れた

【避難所の孤立】

- ・命は助かったが、震災後2日間水が引かなかった
- ・避難所によっては物資が無く、少量の乾パンをかじって飢えをしのいだ



- ・暖をとる事も出来なかった
- ・ばらばらに避難したため家族の安否がわからず不安であった

【学校の水没】

- ・避難所になるべき学校が水没し学校を中心としたコミュニティが崩壊
- ・100人の児童が既に釜石市から離れた。学校が再開出来るか懸念

◆教訓

【早期警戒】

- ・津波避難は時間との勝負で、危険を確実に伝える手段が必要
- ・普段使っている情報源、情報発信源が使えるとは限らない
- ・今回の震災では、情報格差が生じた（情報の有無で生死が分かれた）

【住民意見】 日常的な声かけや情報共有の必要性がある

【災害弱者の保護、誘導】

- ・“てんでんこ”に避難した人が大半
- ・高齢者、体の不自由な方は、逃げる方法がなかった

【住民意見】 “てんでんこ”は教訓の伝承として良かった

今回の震災を伝えるための、てんでんこを超える思想が必要

※ “てんでんこ”は、「てんでばらばらににげる」自分の命は自分で守る、という思想

【避難所の孤立の解消】

- ・逃げることは出来たが、避難生活において不自由を強いられた
- ・避難先が孤立しないためのハード整備が必要
 ＜候補となる道＞旧道、昔の地元の子供の遊び“陣屋遊び”のルート
 ※ “陣屋遊び”は、山の頂上に陣を作り攻防をする遊び（陣取り合戦の拡大した遊び）

◆テーマの抽出課題

【避難地のネットワーク化】

- ・命を守る方法の最も有効な事は逃げることである
- ・避難後、そこで命を落す人がいないようにネットワークづくりが重要
 更に上へ登れる道の整備
 避難所の孤立を防ぐための避難所間のネットワーク整備

【命を守る土地利用】

- ・鵜住居地区は、殆どの家屋が倒壊・流失し、まちの機能がなくなった
- ・小中学校が津波に飲まれ使えなくなり、地区のコミュニティが崩壊
 今回の震災の教訓を生かし、次につくるまちは安心して暮らせるように
 高台に学校をつくり、住宅も被害に合わないような場所につくることを
 方針とする。

【てんでんこを超える思想】

- ・過去の教訓を残したてんでんこは命を救ったが救いきれなかった命があった事も事実である。

今回の震災で様々な教訓を継ぎ足して次の世代に残し伝えることが必要



(2) まちづくりの提案

「グリーン・ツーリズムを基軸としたハードづくり」

地域の資源を最大限に活かしたハード作りが重要であり、「安全性」と「地域性」を活かした防浪施設を作ること目標とする「**海辺の森**」を作る。

【てんでん声】

「てんでんこ」を超える思想として、次の3つが「てんでん声」の思想

- ①避難前 近所の家族構成や生活を把握し、挨拶など声かけを心がける
- ②避難中 「てんでんこ」を守りつつ、声かけしながら逃げる
- ③避難後 避難所でも声をかけあい、コミュニケーションの維持

【陣屋ネットワーク】

- ・山の中腹部に陣屋のような簡単な寺子屋を複数作る（一次避難場所）
- ・山頂部に塔のような避難場所をつくる（二次避難場所）
- 陣屋（寺子屋）や塔を、「世界一の避難路」として観光地としても利用

【海辺の森】

- ・津波で流された平地はかつての湿原や沼に戻し、観光資源として活用
- ・路線を15m盛り上げ、防潮堤の機能を持たせる
- ・路線は壁ではなく丘にすることで景観を確保（丘の構築には瓦礫を利用）

【学校の移設と街の機能配置】

- ・学校は浸水しない場所に配置
- ・幹線道路（国道・バイパスなど）と連絡が取れる位置に避難所を配置
- ・流出住戸は1670戸。以下の3つを主軸に住居を配置
 - ①学校付近に配置し集合住宅とする
 - ②浸水深2～6mの場所：1階を商業施設、2階以上を住居とした住宅群とする
 - ③浸水深6m以上の場所：平地の山沿いに沿うように中層の集合住宅とする

※ ②③では上層階からも山へ避難できるように配慮。



2.2 地域性グループのまとめ

(1) グループ討議の整理

◆マインドマップ

【こころ、思い】

お花と桜／祈り／祈りながらさっさと次へ／戻りたい／地元にもどる／自分たちの手でつくる故郷／国に頼らない／復興と町おこしを同時に／200年のふるさとづくり／高齢者とこどもの人口増加

【伝承】

手踊り／鹿舞／虎舞／神輿／神輿復旧／神輿の会議／鳥居の上に神

【語り継ぎ】

“てんでんこ”で逃げる／津波のときは声が届かない／防災教育／津波経験／集会所に逃げた方が強い／中学生が小学生を誘導

【イベント（日常）】

町内会／町内会の繋がり／町内間の戦い／町内間の助け合い／地域コミュニティ／少年団／町内のグラウンド／こども

【イベント（非日常）】

祭り／火の神／復旧／観光と生活／グリーンツーリズム／海水浴場／キャンプ場／ヨットハーバー／サーファー／トライアスロン／国際大会

【三陸、海、川、山】

川が海に／きれいな海／きれいな川の水／山の緑／波／砂浜／松林／自然が戻りたい形／古地図と同じ／五年に一度の高潮による海の浄化／共生／山に住宅海で生活／海と近い暮らし／防潮林／避難道／神社／神輿の通り道／寺

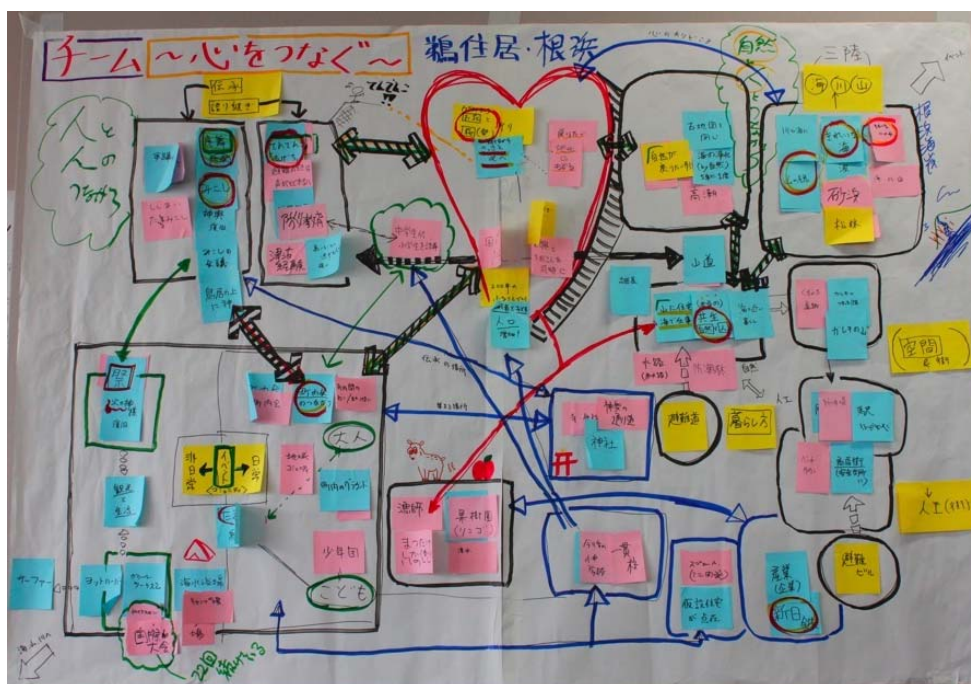
【人工】

防波堤／駅がながれた／ベッタウン／商店街／避難ビル

【その他、要素の少ないカテゴリ】

漁師／今後の小中学校一貫／ミニ開発／仮設住宅が点在／産業

これらのカテゴリーが様々な関係性で繋がっている。



◆地図上で地域状況を整理

【町内会と地割り】

- ・全部で9町内会がある（現在の地割りと関係なく町内会が形成）
川目町内会(80人) 新神町内会(150人) 上町内会(190人)
仲町内会(110人) 片岸町内会(?) 順町内会(90人) 新順町内会(230人)
外山町内会(20人)

【小さい頃遊んだ場所】

- ・北高、市立鵜住居幼稚園、日向グラウンド

【神輿ルート】

- ・鵜住居神社(8:30 発)→公民館(9:00 着、9:50 発)→金毘羅(10:10 着 10:50 発)→祭場(11:10 着 11:50 発)→日向グラウンド(12:10 着 14:30 発)→鵜住居神社(14:50 着)

【通学路(鵜住居小学校中学校)】

- ・金毘羅前の直線道は通学時に車両禁止となる
- ・川を越えた北側エリアは西側ルートを通学路と指定されているが実際は東側ルートを通る

【眺めの良い場所】

- ・常楽寺の脇の山からは、鵜住居と海が一望できる

【景観の良いルート】

- ・紅葉と雪景色の美しい山／鵜住居小中学校南の桜並木／川沿いの南側の道（高校生のデートコース）

【北高生と住民との繋がり】

- ・市立鵜住居幼稚園へのボランティア
- ・鵜住居駅へのボランティア
- ・愛恵会養護老人ホームと五葉寮デイサービスセンターへのボランティア
- ・根浜海岸への大掃除(7月)

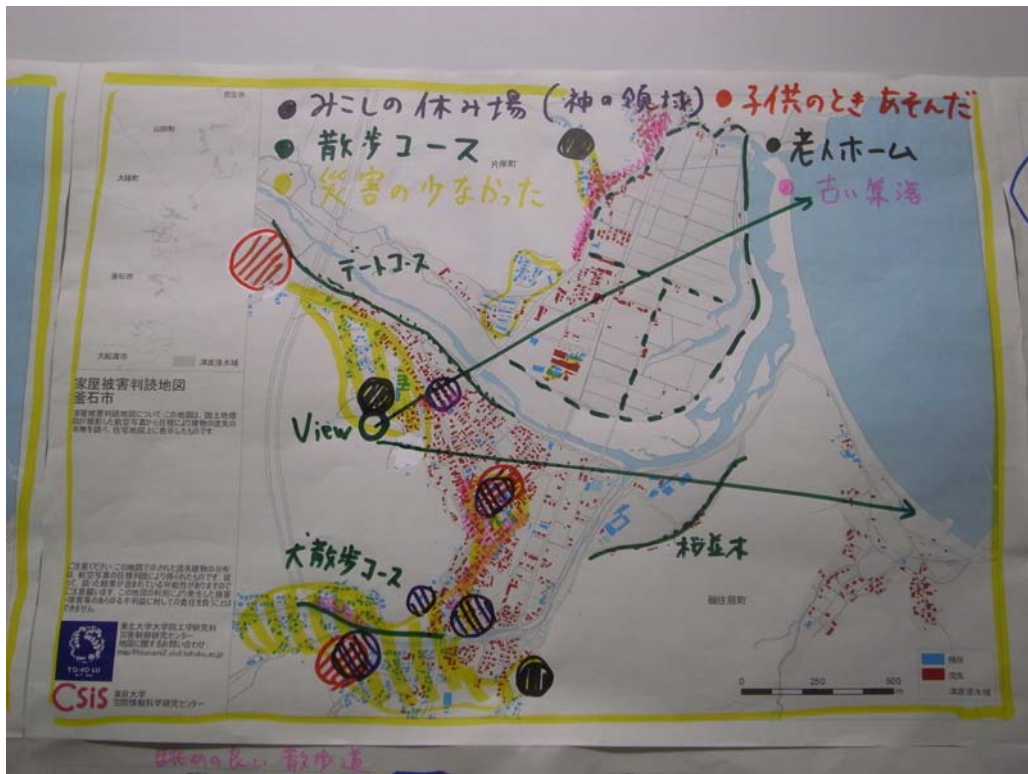
【1948年の集落の分布】

- ・鵜住居神社のある山に沿って1km、道路を中心に約150m幅で分布

【水の被害が少なめだったエリア】

鵜住居神社のある山に沿うように被害が少なめのエリアが広がる





【基礎情報の整理】

- ・ 鶴住居の山際は、祭のルート（神輿の休む場所）・通学路・古い集落・水の被害が少ないエリア・小さい頃あそんだ場所・散歩コース
- ・ 地域住民の行動エリアに重なりが見られる
- ・ 古い集落や神社を中心に住宅が広がっている
- ・ 元々津波の被害が少ないエリアでもあった
- ・ 地域コミュニティと防災エリアに関連性が見られる
- ・ 神社の裏には避難路になる山道や、コミュニティショップ、ボランティアなどの活動もある



(2) まちづくりの提案

鶴住居らしさが残る JR 鶴住居駅付近は元来、地域と人が繋がっていた場所であり、防災など重要なエリアとも重なる神輿コースを中心に住宅を集める

◆神輿が通る幹線道路と山際の上に小道を作る

- ・歩車分離により祭りの時は神輿コース、日常時は生活の場が出来る

◆山側に住宅の他、山道へ続く道や広場を設ける

- ・日常的に使う空間と避難道を近づける
祭りの時は踊る場所、日常時には集まる場所として利用
陣屋遊びなど防災教育が日常生活で伝えられる
登った先に海への景色が広がり、繋がる

◆登りやすい場所に神社と山道がある

- ・山道が無いところにはスロープを作り一定スパンに避難路を設ける
- ・山際の建物には屋上から山へ抜けられるような高層建築も考える

◆道路側に住宅の他、駐車場と商業を設ける

- ・観光の場と住民が繋がる場が出来る→また住みたいと思う

◆小道に以前はあった水路を通し防災性を高める

◆神輿コースを中心に他の道につないでいく



2.3 産業グループのまとめ

(1) グループ討議の整理

鵜住居の特徴

- ・ベッドタウン
- ・広域で考えると鵜住居とセットになる栗橋
- ・漁港
- ・三陸縦貫道

鵜住居の震災前の産業状況

【観光】

グリーンツーリズムやっていた
海と山の体験
仙台などから学校単位でも来ていた
交流していた

【買い物等サービス】

スーパー 4 つ／商店街／旅館 2 つ／病院 2 つくらい／食堂 2 つ

【住居と水田】

どこの農家の水田か → 大槌の入江の人 → でも海水でもう使えない

【漁業】

ホタテとホヤとカキ

鵜住居の震災後の現況

- ・仕事がなければ人が戻ってこない
- ・漁師はばらばらに仮設市街地住まい
- ・買い物は大槌と釜石のローソン → 鵜住居の南西に酒屋が一店残った

個人商店や漁師以外はどこに勤めていたか

釜石 鵜住居～釜石間の通勤ラッシュがすごかった

ベッドタウンということは若い世帯か

古い家は無い 古い家は鵜住居より奥のほう

産地直送販売が鵜住居と遠野の間にある

遠野の人に買われていた → 釜石より近くて便利だから

便利だった施設はあるか

生活改善センター（農家の改善するところ）
祭りのとき拠点になる
祭りは町内会単位で参加（消防団は関係ない）



浸水地域の産業どうなる

水田は海水でもうもどらないし地盤沈下
標高 800 メートルくらいの農地ではそばが頑張っている

上流に宅地ができれば今まで下流に住んでいた人は移動するか？

わからない、若い人の意見が聞きたい
低地になっているところが家一軒に一人ずつは亡くなってる

海沿いに松林と砂浜があった

いつからか台風とかで砂浜が消えた
台風の度に砂浜が消えたりまた出てきたりした
松島町では複数の島が津波を乱反射し被害を抑えた

地盤沈下したエリアはどうするのか

元の商店街はどうだったか

衰退していた → 自分の代で店を閉めるという声が多かった

元の入り江の利用

宝来館の眺めの良い温泉は利用が多かった
鮎の遡上を楽しまれた
震災で川と海の境界が無くなってしまった

三陸縦貫道は途中までしか使わない

普段は商店街の方の道路を通る
しかし震災で絶対必要なインフラとわかった

釜石新日鉄が最盛期のとき漁業や農業人口が移った

山の水力発電と風力発電

東中学校と鶴住居小学校

自分達の判断で避難し身を守った

栗林、橋野あたりは役所があった

昔は海の方より栄えていた

橋野地区直売組合

16年目で会長佐々木章夫さん
40～50人が出荷している
直売は安全と安定が難しい
直売の仕組は委託



鳥住居産業

ビジョンを明確に

- 1974年10月、**鳥住居産業株式会社**設立
- 以香谷地区、250戸の鳥住居を建設
- 鳥住居の完成、応用が広がる
- +100戸以上 (2017年)

未来

- 鳥住居の活用、多様な利用
- 鳥住居の活用、多様な利用
- 鳥住居の活用、多様な利用

自然

- 鳥住居の自然環境
- 鳥住居の自然環境
- 鳥住居の自然環境

食物

- 鳥住居の食物
- 鳥住居の食物
- 鳥住居の食物

インフラ

- 鳥住居のインフラ
- 鳥住居のインフラ
- 鳥住居のインフラ

働く場所

- 鳥住居の働く場所
- 鳥住居の働く場所
- 鳥住居の働く場所

観光

- 鳥住居の観光
- 鳥住居の観光
- 鳥住居の観光

- ・ F & A の F
民泊はお金が取れない
民泊は安く泊まれるがサービスも薄くなり人が来なくなる危険
- ・ 橋野に南部の古民家がある → 観光資源とならないか
- ・ 学校をつくること → ハードまで学校をつくるとリスクが大きい
- ・ 今までの産業をどういかにしてまた成り立たせるか
→ ある産業に携わる人口が多いことが大切
漁業や製造業よりサービス業が一番多い
若い人も雇用できたらいい

(2) まちづくりの提案

テーマ：「身内が住んでも訪れても楽しい街！」

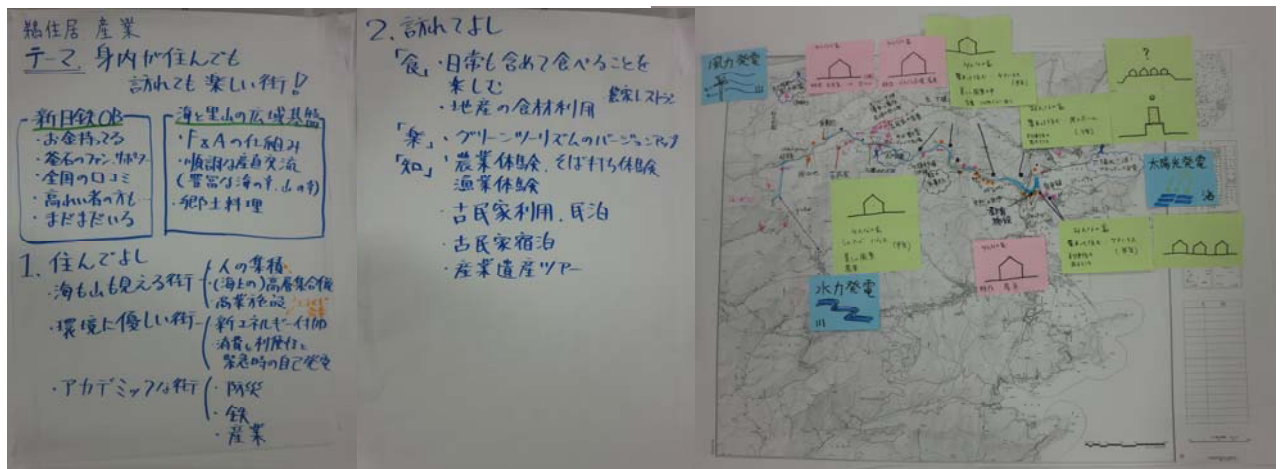
◆鵜住居の財産

【新日鉄のOB】

「釜石」にある種の響き、釜石のファン
全国への口コミ効果
お金持っている
まだまだOBは出てくる

【海と里山の広域基盤】

F & Aの仕組み
順調な産直交流
郷土料理を作るお母さんたちの集まり



◆住んで楽しい鵜住居

【考え方】

- ・海も山もみえる住まい
- ・環境にやさしい住まい方
新エネルギーを利用できるエコ住居
- ・充実した生活
スクールなどアカデミックな機能

◆訪れて楽しい鵜住居

- 【食】 日常も含めて食べることを楽しむ
農家レストラン／地産の食材利用
- 【楽】 グリーンツーリズムのバージョンアップ
- 【知】 農家体験／そば打ち体験／漁業体験／古民家利用／民泊／
産業遺産ツアー



鵜住居浸水エリアの大きな課題

- ・人が住み続けられる、営み続けられること
- ・津波で分断された観光地のつながりをなおすこと

鵜住居浸水エリアの土地利用

【地盤沈下した水田】

- ・未利用地としてゆっくり考える
- ・塩分を抜くためにもひまわりなどで花畑
- ・今まで水田とゴルフ場 → 抵抗が無かったため波の勢い強かった → 凹凸のある公園

【住居】

- ・ 山際に寄せた方が安全

【市街地】

- ・ 沿岸より奥へ移動した方が安全
- ・ 市街地の今後のあり方を考えるのは難しい
- ・ 産直レストランを置いてF&Aをつなげる

【根浜や箱崎】

- ・ 再び海の観光を戻す
- ・ BBQ 場やマリーナなどをまた置く
- ・ 沿岸にサイクリングロードつくる

【川沿い】

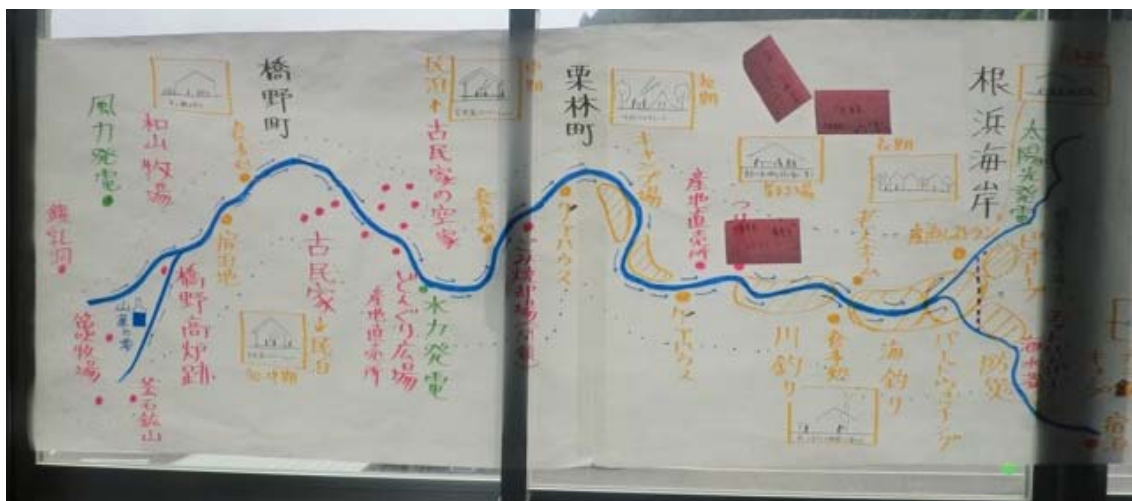
- ・ ビオトープを意識してF&Aをつなげる
- ・ 海から里山までサイクリングロードつくる
- ・ 川観光の施設を置く

【小中学校があった場所】

- ・ 小中学生が避難して逃げ切ったルート→利用して防災にいかす
- ・ 小中学校があった敷地→防災の教育や発信の取り組みの拠点を置く

住民（宝来館おかみさん）の話

- ・ 一週間または一ヶ月楽しめるリゾートとしての観光
- ・ 里山と海どちらも観光してほしい
- ・ 古民家の利用（一週間観光する想定）



実際にスケジュールコーディネート（時間軸でのプログラム）

森本は海の恋人ツアー	
海はこわくない！戻ってくるべきところ！	
1日目 午前 昼 14:00 17:00	花巻空着 ↓ 遠野にて灯籠焼きランチ 語り人さんの話を聞く 笛吹峠よき(おれ)の声 カニ網をかけるよ夜光虫が舞う 薄曇の中、11-11キョー
2日目 朝 昼 夕	釜石魚市場で木場り見学(お魚) 利身の朝食 (漁師の船にのり大槌港や番屋料理を) キャンプ場、アトナでゆくり過ごす 産直直ぐのイタリアン料理を食える 海を遠くに花畑でゆくり過ごす
3日目 朝 昼 夕	おにぎり持て釣りん サウナ浴で無人の浜へ浜でのんびり 宝来館の海の見えよ風呂でゆくり

4日目 神に 会に行く	とらまい、ししまいなど郷土芸能を学ぶ 神社巡り - 釜石は神様が近い 橋野の〇〇神社など 秘座の神社
5日目 民泊	山の中腹 風の吹き抜ける民家へ民泊 おじいちゃん おばあちゃんの話聞く 一日 山の生活 川釣り さことり(ぶるで採る)
6日目 朝 昼 夜 畑仕事	種まき 畑でお昼 畑仕事 宝来館 泊
7日目	帰り

すぐ	・種うえ(う) 燈籠の森 ・古民家、キャンプ場利用(A) ・仮設産直(うとA)
2年後	・住宅建設(う) ・未利用地の本利用化に向ける ・防災世界会や(う) ・「下」の復活
5年後	・戻ってくるまち

2.4 居住グループのまとめ

(1) 聞き取り調査(鶴住居地区での聞き取り)

◆地域の声のまとめ

【当たり前な日常が幸せ】

- ・ ライフラインの重要性（お風呂に入れて泣いた）
- ・ 暮らしの立て直しが第一
- ・ 子ども達も「今まで通りがいい」と感じている
- ・ 店に商品があるということが幸せ

【人と人との繋がり、コミュニティを大切にしたい】

- ・ みんなで一緒にいたい
- ・ 自分の土地が皆の役に立てばいい
- ・ 地域の人が顔見知りだったから避難の声かけが生まれた
- ・ 地域の人と住めるなら居住形態（一戸建て、アパート）にこだわらない

【仕事と生活】

- ・ 仕事によって住む場所は影響を受ける
- ・ 仕事が決まらなないと先のことが考えられない

【大人から子どもへ】

- ・ 子どもを転校させたくない（小中が隣り合った環境は魅力的）
- ・ 一生の友達ができるような地域を守りたい
- ・ 大人が頑張っている姿を子どもに見せたい

(2) 条件の整理

◆残すべきもの

【自然環境・景観】

- ・ 海風、山、川、海、気候
- ・ 根浜の砂丘、国道一根浜の朴の木

【公共施設・インフラ】

- ・ みんなを助けた三陸縦貫自動車道

【くらし・生活】

- ・ 小中学校の防災教育（中学生が小学生を連れて避難）
- ・ 5月末～6月に咲く大きな白い花
- ・ 冬の時期 黒森神楽の宿（農閑期の移動神楽）
- ・ 新浜町の湾の一部が天然プールと呼ばれていた

【地域・コミュニティ】

- ・ 地域と学校（先生方）の信頼関係
- ・ 小中学校での9年間の一貫教育



- ・日常的な地域交流（廃品回収や子ども会への差し入れ）
- ・てんでんこ広場の概念
- ・トライアスロン・レゲエ等のレジャー

◆改善すべきもの

【自然環境・景観】

- ・津波に強い防波堤（海が見えないと嫌だという声もあるものの）
- ・昔の砂浜に戻したい（ヨットハーバーが無かった頃）

【公共施設・インフラ】

- ・J R 山田線の線路復旧（予算は問題だが新ルートも考慮）
- ・停電時でも連絡の取れる通信設備
- ・三陸縦貫自動車道が大槌以北、釜石以南にも延伸
- ・海沿いの道路、通学路を安全にする
- ・三陸縦貫自動車道から根浜地区への経路が欲しい
- ・避難場所を近くに、分かりやすく
- ・防災センターの安全性確保
- ・桑ノ浜・室浜への海岸道路は今後も危険

【くらし・生活】

- ・山沿いに住宅地をつくる
- ・公園を多くする
- ・栗林・日向に店を分散して便利に（遊ぶ場所も欲しい）
- ・根浜のレストハウスが壊れた

【地域・コミュニティ】

- ・皆が集まれる場所ほしい（マスト・飲み屋・カラオケ）
- ・通学路（子どもが被災地を目にしないように）
- ・一次避難場所を増やして滞在できる二次避難所も作る

◆震災で変化したもの

【公共施設・インフラ】

- ・子どもの遊び場がなくなった（公園が現在仮設になったため）
- ・海沿いの道路が通行できなくなった
- ・公共施設の在り方（学校・公民館・体育館が避難所に）

【くらし・生活】

- ・空地が仮設住宅地になった
- ・住まいの中心が栗林に移動した
- ・鵜住居小学校は約 100 人が転校した
- ・学年ごとに他の小学校を間借りしている



【地域・コミュニティ】

- ・高校生が遊ぶ様子が見られなくなった
- ・娯楽施設（カラオケ等）がなくなった
- ・みんなで集まる場所がなくなった（集会所→避難所）
- ・もとのコミュニティがバラバラになった
- ・仮設に入る際、避難所でのコミュニティもバラバラに

◆ライフスタイル・鵜住居らしさ

【自然環境】

- ・住人の職場と住まいが近い（地形のせい？）

【くらし・生活】

- ・日向・桜木町は新日鉄の社宅→通勤渋滞があった
- ・大槌との繋がりが強い
- ・地域に密着したお店があった
- ・ピリッとした気質（校則厳しい、合唱等も頑張る）
- ・タフな子が多い
- ・小中学校から一生続く友情
- ・学校を中心とした地域交流
- ・トライアスロン等のイベントで県外から来る人も

【地域・コミュニティ】

- ・世代を超えた交流
- ・小中学校を中心とした地域交流、先生と地域の信頼関係
- ・大人が他人の子を叱る、皆で地域の子供を見守る

◆鵜住居の復興のあり方

【ゾーニング（優先順）】

- ①安全な所に住む
- ②仮設住宅地をそのまま住宅地に
- ③工業系の用途地域再考？
- ④浸水域外への学校の移転
- ⑤浸水域を自然公園に
- ⑥北高の近くに小中学校を配置？

【土地利用（優先順）】

- ①浸水域内での危険度の違いを考慮すべき
- ②すぐ背後の山を一部削って宅地化
- ③バイパス沿いに公共施設
- ④自然の姿を大切に（浜辺を残したい）
- ⑤海水浴ができる浜辺



【インフラ（優先順）】

- ①沿岸道路・通学路の安全性
- ②避難道路の整備
- ③コミュニティバス（100 円くらいで乗れると良い）
- ④集落の孤立を無くしネットワーク化（根浜・箱崎）

【公共施設（優先順）】

- ①防災センターの配置
- ②屋上への外階段・屋上の手すり等、安全な設計
- ③生活インフラを便利に配置（買い物など）
- ④通信設備や情報の拠点
- ⑤身近に逃げる場所を点在させ、正しく認知
- ⑥防災ビルをつくる（命の安全）
- ⑦高齢化に対しグループホームや福祉施設を整備
- ⑧子どもの遊び場
- ⑨みんなで集まれる場所が欲しい

【学校】

- ・小中学校を中心とした地域づくり
- ・地域センターや学童も一体化すると良いのでは
- ・避難生活にも対応できる学校

【住宅】

- ・海を見て生活したい場合、小高い丘や裏山を生かし住宅地化
- ・集合して住むことを考える
- ・ライフスタイルの変化（場所と形態）
- ・住宅＋安心できる避難道路
- ・元の土地の価値に見合う代わりの土地を（便利さ、広さ）

◆地域資源図から読み取れること

- ・西側は浸水区域予想ラインが設定されていなかった
- ・日向に仮設がつくられている→今後も住宅地となる可能性
- ・山田線と国道 45 号と三陸自動車道が 3 段構えの防御になる

◆ゾーニングの提案

安全に住めるエリア

- ・今回安全に避難できた集落に点在する高台
- ・バイパスと国道 45 号の間の山を一部削る
- ・仮設住宅のエリア
- ・今回の浸水ラインの西側

箱崎～遺跡までの自然歩道を室浜まで入り江沿いに拡張



箱崎～大槌一帯を自然公園に

- ・一部をトライアスロンの会場
- ・住民の健康づくりと交流の場

三陸自動車道から南の集落に下りる道路が欲しい

指定避難所の周知の徹底（関連施設との誤解のないように）

紀州造林に小中学校では遠い、元遺体安置所なので抵抗感

- ・北高の跡地を小中学校にしたらどうか（企業との関係が問題）

(3) まちづくりの提案

◆復興計画のテーマ

「コミュニティを維持しながら、自然に抱かれ今まで通りに」

◆基本方針

基本方針 1. 津波と共に生きる

- ・浸水域を基本としたゾーニング
- ・ゾーン別の暮らし方の検討
- ・避難のための移動経路の確保

基本方針 2. コミュニティを中心とした暮らしの再生

- ・小中学校の繋ぎの維持
- ・町内会を元気にする
- ・みんなが気軽に集まれる場をつくる
- ・お店もコミュニティの一員

基本方針 3. 豊かな自然を楽しむ喜び

- ・黄金の砂浜をふみしめる
- ・海の幸、川の幸を採る楽しみ・食べる楽しみ
- ・たくさんの人が楽しみを共有する



◆土地利用のコンセプト

【インフラ】

- ・防波堤を従来通り復旧
- ・三陸縦貫自動車道の延伸
- ・集落・避難所を繋ぐネットワーク道路
- ・コミュニティバス

【基本ゾーニング】

- ・浸水ゾーン（ゾーンA）
危険度の違いに応じ判断
- ・浸水際の傾斜地（ゾーンB 1）と一時避難所（B 2）
主に住宅
津波避難ビル兼宿泊施設、ロッジ
低層の集合住宅（集落は戸建・公営住宅）
- ・浸水しなかったゾーン（ゾーンC）
住宅と産業、学校、コミュニティ施設
ゆったりした戸建住宅
カーディーラー、板金工場、ガソリンスタンド、
スーパー、個人商店

◆自然エリアのゾーニングと活用策

- ・ビオトープ
- ・海浜公園（砂浜サンドアート、レゲエ、トライアスロン、海水療法、
地引網対決）
- ・ございしょ山（自然散策、環境教育、遊び場）

◆住居のタイプ

- ・山際の集合住宅（ゾーンB 1）
元々ある町内会のまとまりを生かし、50 戸に一つの集会所
- ・漁村集落の戸建住宅（ゾーンB 2）
- ・内陸の戸建住宅（ゾーンC）



3. 釜石東部地区のまとめ

釜石東部地区において、防災、地域性、産業、居住の視点より土地利用のあり方について検討を行った。

3.1 防災グループのまとめ

(1) 現地状況の整理

今回の津波を受けての防災計画の問題と有効性の再検討

◆津波は何によって守られたか

- ・湾口防波堤・防潮堤
- ・活性炭（積み上げられていた）
- ・中番庫（新日鉄+2mの土地）

◆湾口防波堤

- ・波を4割程弱めたという効果
※再構築に時間と費用がかかる→湾口防波堤以外の安心安全なまちづくり

◆避難場所

- ・公＝避難場所という固定観念があり避難に失敗した例がある
- ・津波避難ビル（市営ビル）は避難場所として多く認識されている
- ・ビルは波除けにもなった
- ・今の避難所は山の傾斜がきつくて登れない

◆避難訓練

- ・1年に1度の避難訓練
- ・訓練は自宅からなので、職場や学校からの事を想定していない
- ・防災訓練は学校ではやっているが、町内会では無いに等しい
- ・住民の意識は、青葉通りより東側に住む方の意識が強い→海に近いから

◆避難経路の現状

- ・県主導で津波浸水地域の看板が4つ立った
- ・訓練の時に経路は教えているけど、実際は感覚的に高台に避難した

◆避難道路

- ・高低差があるがここしか逃げる場所が無い
- ・散歩や管理をしているからなじみがある
- ・階段が急こう配なので高齢者にとってはきつい

◆避難意識

- ・青葉通り以东は津波の被害を以前受けているので意識は高い

◆避難生活

- ・道が断絶され施設に避難ができなかった人は近所で助け合い避難させてもらった
- ・行政の指定された避難所じゃないと物資が届かない
- ・避難当初は物資が無かったから、運搬しようと思ったけど道が瓦礫で通れなくなっていて、山の道を通って届けた
- ・道路が機能しない
- ・病院に薬が届かなかった



◆被害状況

- ・こどもを連れ帰ろうとして亡くなった
- ・水門を閉めにいって、一服してたら被害にあった

◆復興計画の進め方

- ・行政指導者の指導性の発揮が必要

(2) まちづくりの提案

◆津波に強い街づくりをするために

コンセプト

釜石東部地区ならではの防災計画
震災後の対応も含めた長い目での防災

防災の観点から特徴づけられる6つのまちの要素

【山際】

土砂災害

- ・土砂災害に強いまちづくり
- ・高台に出来た建物などの土砂災害に対する対策
- ・避難道路の抜本的改良
- ・雨の時に地震が起きたら土砂災害で避難道路が危険

風景

- ・避難道路からの景色（眺望）は良い

アクセス

- ・高齢者の避難が大変
- ・避難道路へのアクセスの充実が必要
- ・バイパスとの関係性を絡めて考える
- ・もっと日常的に使える道にすることで避難の意識も高める
- ・高台はあるがアクセス道が少ない→高台へのアクセスルートを増やす

【山中】

バイパス

- ・山道の整備→北側は物資の運搬に役立った、南側は道がない
- ・バイパスの重要性（支援、復興）

【街】

建築の高さや形状

- ・津波で壊れることは前提→全て堅固でなく、柔軟に波を受け流す
- ・ハードだけでは防げない
- ・形態は丸いと残りやすい（三菱の看板は残っていた）
- ・堅固な建物の後ろや壁の前は、波に巻き込まれている→配置は要検討
- ・2階がつながったまちはどうか
- ・高い建物は安心感がある→もっと設けていくべき
- ・地盤の嵩上げは有効→まちに建物が残っているので対応が困難では？

避難所

- ・避難所が被害を受けており、高台に設けるべき



公共施設の場所

- ・被災後に機能しないのは問題→消防、病院、警察署

エネルギー

- ・ソーラーシステムの活用
- ・避難した後に独立したエネルギー共有が必要

インフラ

- ・災害の状況を把握するための連絡手段の確保
- ・防災無線が当時使えなかった＝情報不足による被害が発生
- ・下水管がやられてしまった
- ・電線を地中下して電源を確保
→仙台はガス管はやられたが、電気に関しては無事だった

【水際】

- ・水産工場は少ない
- ・震災後の浸水はない様子
- ・水際対策を強化すべき
- ・東浜は地盤沈下で浸水している
- ・浸水の名残はあまり見られない→悪臭無し

【中番庫】

- ・釜石しか持っていないメリット
- ・中番庫を活用
- ・公道の接合
- ・用途地域を変える
- ・リストラをする（再構築）

【新しい土地】

- ・そもそも東部地区に住むのか？
- ・バイパス沿いに新しい街をつくったらどうか？
- ・島を浮かせたらどうか

◆論点の整理

防災の観点から特徴づけられるまちの要素の中で水際は具体的な課題があまり見つからない。その背景には街の中心にある中番庫によって街と海との関係性が分断されてしまっていることがあると考えられる。また中番庫には広大な土地と空地があり、その活用法として企業の誘致などあらゆる提案がされてきたが実現には至っていない。街に関しては具体的な課題が多く挙がった。

◆中番庫 全体の考え方

【開放のための条件】

- ・街を守る防波堤としての機能
- ・避難場所を備えた自立的な場所にする

【行政・新日鉄中心に】 今あるものを活かす

○街を守る防波堤としての機能を持たせるための中番庫再構築の方向性
壁、マウンドの二つの案



壁：NSオカムラ

NS岡村の工場建物が果たした効果はある種の防波堤になっている

NSオカムラ→新日鉄の倉庫だった→移転の可能性も考えられるか→NSオカムラに務める人も家族があるので廃止は難しい（街の産業として必要）

- ・津波に対して2メートル上がった土地も安心だがオカムラの存在も安心感を与えている
- ・道路をつくると税金が高くなるので企業にとっては嫌だ
- ・第1波は防げたが第2波は防げなかった→それによって助かった人もかなりいる
- ・必ずしもリニアなものではない

グリーンセンター：高層避難ビル

- ・屋上に避難もできる展望の場を設ける
- ・展望の場から街へアクセスできる通路を設ける

マウンド：土地をマウンド上にして（瓦礫で）波の勢い防ぐ

公園として利用（街の中心にある公園として普段は利用する）

車で登れる高台

他の活用の案

石炭の山 → 石炭の山の斜面にソーラーパネルを設置

リバーサイド → 川の資源も活かしてリバーサイドウォークを設置

すぐやれること

仮設の商店街

仮設の工場（被害にあった工場を稼働させることで市民の外部への流出を防ぐ）

街

東部地区を視察したところ4つの地区（大渡、大町、只越、浜町）で避難状況が異なったため、被害状況から考えられるそれぞれの避難計画や地区の在り方を考えた。

只越

被害状況：建物の2階まで浸水

特徴：山までの距離が短い、高層の避難ビルがある

山際の避難道路へのアクセスを増やす

市営ビルの外階段を道からアプローチしやすくする

大町

被害状況：建物の2階まで浸水

特徴：・山までの距離が長い、高層の避難ビルが少ない

- ・日常的に有効な公共建築を街区単位で高層、分散化させアクセスしやすくする
- ・民間建築を小さい単位で集合化させて高層化支援する（補助金など）
- ・一時避難することができても戻る道が瓦礫等で通れなくなり、孤立することが起きるため1階を天井高の高い店舗とし、2階以上を住居とする→住商を立体的に扱う
- ・民間建築が集合し高層化することを行政が支援する



- ・ グランドレベルを自動車専用の道とし、その上をペデストリアンデッキで街を結ぶ
- ・ 1 階の階高を上げる

大渡

被害状況：1 階程度まで浸水、海からより川からの浸水

- 特徴：
- ・ 山まで比較的近い、指定避難ビル少ない
 - ・ 既存の建物同士の屋上をつなぐ

浜町

被害状況：多くの建物が倒壊、流出した

- 特徴：
- ・ 昔から津波を繰り返している
 - ・ 段階的に盛土をした方が良いのではないか
 - ・ 土は散歩道路の上の山から
 - ・ 街の歴史を消すことになる

商店街はどうするのか

- 商店をやめたい人が多い→魅力を取り戻す
- 横並びの店舗を上積みして高いビルにする
- 商店街の連続性を残さないとさびしい街になる

水際：全体の嵩上げ

- 街の安全を確保するために山を切り崩して水際に盛土すべき
- 安心して住むためにはとにかく盛土をしてほしい
- 山を切り崩すということは簡単にはいかない
- 避難道路の背後の山（天王山）は切り崩せる可能性がある
- 盛土によってまちの歴史を途絶えてしまっていないのか

水際の地域では壊滅的な被害を受け、さらに 1 m 地盤が沈下しているため、それを直す際に 2m もしくは 3m 地上げするという話はある

防波堤：防波堤の高さ上げる

- 単に水際に高い防波堤を作るとは海の街としてうたわれている釜石の景観として適切なのか
- 街の中にできるだけ溶け込むように段階的に 2、3 重に防波堤のような機能になるものを設置してみてはどうか

山際：天王山の有効利用を考える

- 釜石の象徴とも言える天王山は今まで開放されてこなかった
- 利用されていない天王山に宿泊施設など人々が日常的に利用できる建物を建設することで高台からの眺望など街の資源を活かすと同時に、一時避難だけであった避難道からアクセスできる避難所としても利用できるのではないか

天王山を開放することによって他の避難経路とも接続をして山際の避難路をネットワーク化し、山際を日常的にも災害時にも利用できるようにすることで釜石らしい防災計画の形成にもつながるのではないか



3.2 地域性グループのまとめ

(1) 現地状況の整理

◆釜石とは

- ・商店街は浜町から始まり現在の所まで伸びてきた
- ・工業（クレーン、製鉄所、煙突など）が街の魅力の1つ
- ・魚市場、魚・海産物おいしい
- ・昔盛んだった鉄産業、今は衰退
- ・釜石にしかないもの
 - 橋上市場や呑ん兵衛横丁は釜石にしかない
 - 製鉄場の前の屋台
- ・釜石よいさ、ラグビー優勝パレードは、メインストリート（商店街）で
- ・山神社（山の神）、しし踊りの神社
- ・尾崎神社（海の神）
- ・明治・大正の松原は砂漠
- ・河川上流にスーパー、大手レストランに人が集まる
- ・河川でまちが分断している

◆現地調査をふまえて

- ・自然（海、山、川など）が自慢
 - 地図で見るより海が遠い、感じられない
- ・工業（製鉄所、煙突、緑のキリン（クレーン）など）が街の魅力
- ・避難道路をベンチや桜で、お年寄りの憩いの場に
- ・橋上市場や呑ん兵衛横丁は釜石の魅力

◆課題

- ・市民全体が「観光の街」ではなく「産業の街」と思っている
- ・かつては10万人と人口が多く限られた平地に住宅を建てていた
- ・象徴がない？
- ・被災した土地の今後の活用
 - 住宅はダメ 避難のために道路だけ残す
- ・人の命を考えるか景観を大切にするのか？
- ・津波の恐怖が忘れられていく、津波を軽視しないために

◆新しいまちの方向性

- ・新日鉄の依存から離れたい
- ・再度淋しい街に戻るのではなく活気ある街へ
- ・被災した地域で危険だからつくりたくないのではなく、逃げることを前提に危険を承知の上で街をつくる
- ・乗上げた貨物船を何かに使えるのでは？
- ・海沿いに象徴的なスポットがほしい
- ・日本一の避難道路をつくりたい
- ・商店街集約してショッピングモールにしては？
- ・盛り土による防災対策
- ・バイパスの高さに合わせて盛り土
- ・盛り土した道路のバリケード



◆課題点をまとめると

- ・津波に対してどの程度許容するのか
- ・街が分断されないように計画すべき
- ・港町の良さを守る
- ・街の求心力が必要

◆現状分析と将来ビジョンの整理

【現状分析】

釜石のシンボル

- ・海、山、川、夜景、星空が美しい
- ・祭りの賑わい
- ・お椀型の地形、リアス式海岸

坑道とそれによってできた「おいしい水」

食文化

- ・イカのお刺身、アワビ、さんま、ウニ、毛ガニ、ホタテなど海鮮物がおいしい
- ・釜石ラーメンもおいしい！

【将来ビジョン】

全体ビジョン

- ・浸水した部分は住宅以外の用途で
- ・建物イメージをそろえて特徴ある風景へ
- ・人が集う仕掛けをつくる
イス、テーブル、屋根、海に開ける場所の整備
- ・坂道をいかすなど、いろいろな性格のスペース

日本一の避難道路

- ・避難道路と地元の主要施設（商店街の軸、医療施設、憩いの場所など）をつなぐ
- ・多様な用途を組み込む
- ・記憶の継承

商店街

- ・青葉通りイベント等行い、生活の軸へ
- ・穴だらけになる商店街をどうにかしたい
- ・魚市場を観光資源に

◆新しいまちの基本方針

1. 自然景観を活かす
2. 人の営みに着目—自然に合わせた生き方—
3. 誰も死なない街をつくる—日本一の避難道—



山や避難道路から見える海や山々、夜景、星空を住民または観光のために活かしたい

今後住宅として再生できない地区

浜町…魚市場より少し山側付近から盛り土し住宅地とする
青葉通り…商店街より少し山側から盛り土し住宅地とする、加えて市民会館など公共施設の大きな建物を津波避難ビルとして防災対策を備える
嬉石町…バイパスの高さに合わせて盛り土し住宅地とする、バイパスもその高さに合わせる

その他の方針

- ・この釜石だけの特徴ともいえる橋上市場、呑んべえ横丁を残す
- ・青葉通りは中番庫を通過して海まで伸ばす
- ・今まで「NS オカムラ」の壁によって感じることをできなかった海を身近に感じることができる。それは、防災や景観を考える
- ・中番庫から埠頭にかけては今のまま復元する
- ・商店街を北側に集約し残った東側は臨界スポーツ公園として再生する
- ・日本一の避難道として生活の一部として住民に使えるようにする
- ・来訪者も避難道がわかるように工夫する

(2) まちづくりの提案

キャッチコピー

「ライフロードがつなげる青い海と緑のキリンがあるまち」

コンセプト

- ・「誰も死なない街」
- ・「避難の大切さ」→「避難道の発展」
- ・「自然と人が作り出したランドスケープ風景」—自然と文明— → 「釜石の風景」…地域性

方針

- ・はやい街の活動の復活を目指す
- ・既存の建物やインフラを最大限に活用する
- ・豊富な自然と文明が出会ってできた釜石だけの風景を大切にする

ライフロード（避難道と暮らし）

- ・道の名前を市から公募
避難道という名前が良くない、もっと暮らしに根付く名前として
- ・横につながることで災害時の孤立を防ぐ
- ・普段から使う、親しみ深い道
分断している避難道をつなぐ、それにより生活、避難時ともに主要施設（学校、寺社、医療）を行き来できる道となる。それは地域性を結ぶ道具でもある。西側は川にもアクセスできる。
- ・避難道別にそれぞれ多目的な道にする、またそれぞれに特徴をつける（普



通の道路と差別化)

商店街…コンパクトになった商店街の空いた敷地にポケットパークにしカフェや滞留する場として活用

浜町山道…滞留する場など

臨界パーク…大きなスロープなど（お年寄り、車いすの方のため等）

※中番庫を活用し海を近くに感じる場所とすることで、住民の意識の中に留めることができる。

- ・商店街、呑んべえ横丁、橋上市場を再生

- ・浜町は魚市場・美味しい食の町として

※盛り土は選択肢の一つとして、これが市民のすべての意見ではない

課題

- ・新漁協方面まで（高齢者が多い）避難道をつなげる

- ・縦の道 → 車が入ると人が逃げられなくなる

3.3 産業グループのまとめ

◆中心商店街

線状に移動距離が長い

- ・両端に位置する橋上市場の復活、そして魚市場を魅力的な建築として設計する
 - 橋上市場を作るには水門の設置が必要
 - 橋上市場は今、シープラザとサン・フィッシュ、そして市内の方へと分かれていった
- ・近い間隔で目標となる建物、空間をつくる
- ・魚市場側にまとまった駐車場を設け、奥から人を歩かせる

多くの商店が被災し、多くの店が閉店する

- ・更地になったところを駐車場や憩いの場として利用
- ・建物の再配置を行い、商店街を高密度まとまったオープンスペースを駐車場や公園などに利用
 - 被災の度合いが違うので、復興のスピードも温度差があるため、もう少し詳細に見て行く必要がある
 - 高密度する単位は要検討（町内会単位、商店街単位？）
- ・高齢者が多いということを検討に入れると5～6軒くらいの単位にまとめてグループホームなど、そこに医療福祉施設を配置

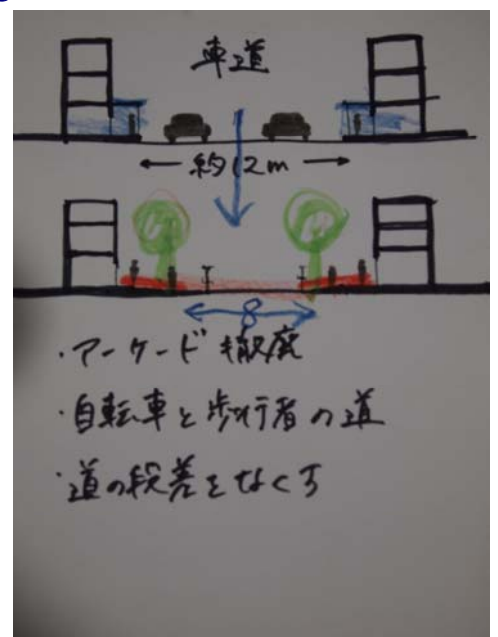


車幅が広いと、商店街としての一体感に欠ける

- ・車幅を狭くし、歩道を広くする
- ・トラックと動線を分ける＝車道がいない
- ・自転車専用道路をつくる
- ・歩行者天国のようにして休日、散歩や子供を自由に遊ばせられるような魅力ある商店街に

現状と課題

- ・回遊性の確保
 - 目的が少なく、土日しか営業しないところもある
- ・市民会館の周りにまとまった駐車場などのオープンスペースがない
 - 演奏会などを開くスペースや練習場所がほしい（港湾部にも）
- ・バイパスが町を分断している
- ・街路空間に緑が少ない



- ・人口減少と商店街の売上減
- ・アーケードが財政を圧迫している
- ・幼稚園を安全な場所へ移動させ、その場所に道を通す
- ・ソフト面でのバックアップが必要

◆中番庫・港湾部

新日鉄との関係性

- ・他の企業の誘致などで、名古屋港などを通して海外との関係性を築く
- ・工場見学など、開かれた工場とする（観光資源）
新日鉄側も釜石との関係をよくしていこうという動きがある
- ・両者を断絶していたNSオカムラを撤去し、商店街になだらかにつながる防波堤を建設し緑化する



海との関係性

- ・既存のランニングコース沿いを緑化する（グリーントライアングル）ことで周囲の町を繋ぐ
- ・NSオカムラは壊し、もっと水際などに移動させ、商店街～中番庫を繋げ、町を海に開かせる

中番庫の土地の利用法

- ・エコ企業の誘致によるエネルギーの自給
- ・大規模ショッピングセンターから用地買収の話が数多くあったのでショッピングセンター内に商店を誘致し、住み分けをする
- ・港の建物を財産に残る建物に、加えて公共施設を誘致する
- ・逃げるための時間を確保する仕掛け
安心して買い物ができるよう、自立防潮堤を
- ・一大流通港湾にする
太平洋沿いの港が軒並みダメージを受けているため流通港としての重要性が高まっている。（釜石港には大きな船が入れるから）

◆水産

釜石港のハブ化・宿泊施設の整備・周囲の漁港と協力

- ・釜石市の知名度が低く、通り過ぎて宮古に人が流れてしまう
- ・大きな船が入ってこれる利点が活かされていない。
- ・南北の港の特産物などを買えるようにする
- ・魚でも鉄でもなくなってきたこの町の観光資源は産業の育成？

現状の漁業・水産加工業

- ・サンマ・鮭・鯖の水揚げ量減
- ・定置網は、億単位の費用が掛かる

- ・汚い・寒い・安い、といったイメージで若者が仕事につかない
- ・お年寄りには厳しい仕事
- ・釜石市に需要がない＝受け入れ態勢がよくない
- ・学生の9割は都心へ出て行ってしまう

水産加工業の集約

- ・免許センターと警察署を街中の方へと移動させ共同スペースを生み出す
- ・周囲の鉄鋼所などと連携が直ぐにとれ、仕事がやりやすいので、ここでや
っていけるなら、そうしたい（知人・仲間がいる利便性）
- ・周囲の加工業の方が出資して共同利用している冷蔵庫がある
- ・加工場が人口減少などで減っている
- ・住宅の近くに加工業を配置すると匂いの問題はないのか？
内陸に移動しても排水コストがかかる

◆全体、その他、複数地域

防災関連

- ・老人でも逃げられる避難経路の確立
青葉通りを中心として商店街につながる道を整備することで分かりや
すい避難道として活用
- ・災害時、東部地区住人約1,500人が留まれる場所が必要
- ・工場などの大きな建物が被害を低減させた
- ・3階以上のところに防災具が備蓄されている
- ・地区ごとに避難訓練は基本山へ、避難ビルに逃げる方法は行っていない
- ・来街者にも住民にも、いつでも逃げられる安全・安心な街づくりを

資源関連

- ・1次・2次・3次産業の地元のネットワークと次の世代へと繋げる第6次
産業（バイオ etc..）
- ・水産加工業でもエコでクリーンなエネルギーを使いたい
- ・様々な発電所があるので、今後増やしていければ、釜石の電力を自給自足
で賄える可能性がある

昼は港湾部に、夜は商店街の方に飲み屋街を再建し、人がいる空間ができれば、活気が出るのでは



3.4 居住グループのまとめ

(1) 現地状況の整理

東部地区問題点（ワークショップ参加者のお話を聞き問題点把握）

- ・避難に関して
- ・高齢化に関して
- ・市役所を中心とした情報網に関して
- ・元々のコミュニティに関して
- ・住民の仕事に関して
- ・これからどうしていくかに関して
- ・空地に関して
- ・仮設住宅に関して

◆ヒアリング調査をふまえた問題点（釜石中学校においてヒアリング実施）

安心・安全に関して（避難場所について）

- ・避難したが一旦帰ってしまい助からなかった
- ・車で避難し渋滞したため間に合わなかった
- ・注意報や警報への危機感不足
- ・高齢者の逃げ遅れ
- ・避難所の住環境が良好でない
- ・新浜町には避難経路少ない
- ・道路工事していて避難しづらかった
- ・道が分断されて避難所に食料が3日間届かず
日常でも活用できる避難場所の整備が必要

仮設住宅に関して

- ・抽選の話がこない
- ・入居の優先順位があって入居できない
- ・中学校の行事などで仮引越しなどの対応をせざるを得ない
- ・仮設住宅を出たあとの暮らしが想像できない
- ・仮設入居後の食料などの支援対応
- ・避難所をはなれた後のコミュニティの不安
仮設に入れても近所の人たちとバラバラになってしまいコミュニティが分断される
仮設住宅間の引越しをしてもとのコミュニティ形成
住む場所を選べるシステムをつくる必要がある
- ・情報共有に関して
家族と何日も連絡取れなかった→家族での決め事が必要
- ・住民の仕事に関して（仮設の商店街に関することも含む）
商売が再開できない
働く場所がないため子供たちが戻ってこない

今後のまちづくりに関して

今は考える余裕がない、材料がない
復興ビジョンがほしい



お金たりない
高齢世帯のため建替できない
今後住みたい場所が三者三様 → 住む場所を選べるシステムが必要

◆ヒアリング調査から見た課題

避難経路

- ・日常でも使うように → 高校生は通学自転車
避難経路を輪状につないで、自転車サーキットコースに

津波到達地点の可視化

- ・道にラインを入れたり、木を植えたりする

津波到達地点より高台に高台住宅地エリアをつくる

新浜町周辺は経済特区に

- ・津波で壊滅的被害をうけ、住民は大半が戻ってこないと推測
- ・新浜町周辺は経済特区に

中番庫の開放

- ・観光施設としてスポーツ施設を誘致

商店街エリアは道路狭くして歩行者、自転車専用道路に

避難ビルのつくりかた

- ・今回の津波は昼だったけど寝ているときに津波がきても助かるように
新規の家は必ず屋上設置（条例などで）
1，2階は住居以外（商業など）3階以上は住居

◆ちゃぶ台ひっくり返し大作戦！

- ・居住って難しい
- ・個人のお金、安全性、財産権の問題など
- ・他人がきめることはどうなんだろう → 自分たちできめよう！
- ・自分たちで決めればずっと自分たちで良くしようとがんばり続けられる

○ワークショップについて（住民の声）居住を考えるのは短期ではできない

P R

- ・自分たちのまちは自分たちで作れるよ！
- ・意見は反映されるんだ！
- ・市民が自覚しよう！！！！

時間の短縮

一週間に一回とか

時期

- ・もう少し落ちついてから
- ・無理強いはいしない



町内会単位で

- ・顔なじみだと話せる
- ・人数が少ないと集まりやすく連絡取りやすい

もっとやわらかい雰囲気で

- ・お茶でものみなながら
- ・職業や生活スタイル共通の単位
- ・高齢者がいる世界のあつまり

今後の住居に関する計画について

- ・なぜベストではないのか
 - 参加者少なかった
 - 復興のためには多くの住民参加が必要
 - 時間も必要
- ・元住んでいた場所に戻るか否かは三者三様
 - 自分が戻っても周り近所は戻ってくるのか
 - 虫食いの宅地も嫌！
 - いろんな希望、可能性
- ・行政が住民の住む場所を決定することは、難しい
 - 市民の理解不足もあるかもしれない
 - そもそもまちは自分たちでつくといいまちになるよ
 - 選択肢を増やすことでみんなが選べるように！！！！



(2) まちづくりの提案

住まいを選べるシステムを選ぶ前提として（まちの条件）

- ・安全なまち
避難経路、避難場所の充実
- ・暮らしやすいまち
高齢化に対応、子供育てやすい、経済活性化
- ・金銭的問題の解決
助成金など

まちに必要な条件

安全な空間である／住まいを選べるシステム／行政の補助

住まいを選べるシステムの提案

- ・自立再建困難、コミュニティの維持
- ・高齢者が集まって暮らす グループホーム
いつ津波が襲来してもとりあえず命だけは
1、2階はだめになるのを前提として店舗や駐車場など住居以外
3階以上を住居に
共同建て替え（高層）
- ・高台に逃げるのはお年寄りなど大変
屋上の設置義務（条例などで）
- ・初めて来た人にも視覚的にわかるように（避難ビルの充実）
公共施設だけではなく私有ビルも避難ビルに
私有ビルの助成金制度などで所有者負担軽減
- ・子供を育てる場所の充実
託児施設の充実

建物のネットワーク化（避難経路の充実）

- ・建物同士をつなぐブリッジなどを設置し避難場所までつなげる
建物をつなぐ道

